

全国消費者団体連絡会と食品安全委員会委員との懇談会（第11回）

1. 日時 : 平成21年7月23日（木） 16:00～17:40
2. 場所 : 食品安全委員会委員会室
3. 出席者 : (敬称略)

(全国消費者団体連絡会)

東京消費者団体連絡センター	矢野 洋子
NPO 法人日本消費者連盟	山浦 康明
NPO 法人東京地域婦人団体連盟	飛田 恵理子
日本生活協同組合連合会組織推進本部	中野 勲
日本生活協同組合連合会組織推進本部	山田 浩史
日本生活協同組合連合会組織推進本部	上田 尚美
生活協同組合さいたまコープ	滝澤 玲子
生活協同組合さいたまコープ	二ノ宮 小百合
社団法人日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会	浅見 豊美
大田区消費者団体連絡協議会	メ野 啓子
全国消費者団体連絡会	阿南 久
全国消費者団体連絡会	藤原 一也
全国消費者団体連絡会	菅 いづみ

(食品安全委員会委員)

小泉委員長、長尾委員、廣瀬委員、見上委員、野村委員、畑江委員、村田委員

(食品安全委員会事務局)

栗本事務局長、大谷次長、大久保総務課長、北條評価課長、
角田勧告広報課長、酒井情報・緊急時対応課長、新本リスクコミュニケーション
官、猿田評価調整官

4. 議 事 (司会：新本リスクコミュニケーション官)

- (1) 委員長挨拶
- (2) 出席者紹介
- (3) 意見交換
課題

「食品安全委員会の役割を消費者にもっと知っていただくためには」

5. 意見交換の主な発言 (○：消団連側発言 △：委員及び事務局側発言)

■食品安全委員会の役割を消費者にもっと知っていただくためには

○：アンケート結果にもあったが、やはり身近でないということが問題。

昨年、農薬について消団連と国とが共催で行った意見交換会は、普通の消費者が事前に疑問に思っている点をHPなどで募集した上で組み立てた。

食安委のリスクは難しい情報を一方的に与えられるイメージであり、それを換えようということで普通の消費者が疑問に思っている点を普通に答えるように努力した。そのせいか、多くの人に参加し、感想も好評であったが、事業者の方が多く消費者が少なかったのは残念であった。

今後は地方の消団連と連携して、地方の農政局や厚生局も呼んで消費者の関心の高いテーマについて、少人数で行う意見交換会を一緒になって開催してほしい。

○：リスクそのものが未成熟とされている現状がある。消費者のとらえ方を個人と団体とを混同しているのではないか。

平常時と緊急時との切り分けについても、平常時はこれまでどおりで良いが、緊急時は別の取組が必要ではないか。また、例えば体細胞クローン家畜の評価においても、容認する立場での説明が中心で、逆の立場での意見を言いたくても言いにくくなっている雰囲気をつくっているのではないか。

リスク専門調査会の機能を変えて、評価内容について、消費者や事業者、管理機関も含めた討議、提案の場とし、この議論を経ればリスク評価の内容に対し消費者の不安が集中することがなくなり、もっと理解が得られることになるのではないか。

現在のリスクでは、消費者は評価内容を理解してもらおう対象でしかなく、一番のリスクを負う消費者がお客様の扱いとなっている。

○：今日の資料にあるアンケート調査でも、生協も情報源としてはかなり信頼の度合いが低いという結果であるが、消費者に対していかに情報を伝えることに苦慮している。参加する人はまだ何かしら生協の取組に関わっている人であり、そうでない人や家庭の主婦に対してどう伝えるか悩むところがある。

子供向けの企画を行うことで、参加した子供が企画で得たことを親に伝えることがあるのではないかと考え、各種の企画を検討している。この場合、どのように募集すれば子供に企画の案内が広く伝わるかが鍵になると思うが、ジュニア食品安全委員会の場合はどのような広報活動をしているのか？

△：近隣の小中学校に担当者が回ってPRするほか、マスコミ等に対しても働きかけを行っているところ。また地方で行うジュニア食品安全委員会においても共催する地方自治体と連携してPRを実施している。

○：生協組織も色々活動をやっているなのでそのような情報があれば活用したい。

○：委員会発足当時は画期的なものと感じたが、今は関心が薄くなっている。どう具体的に消費者の利益を守っているのか、難しくイメージが湧かない。

これは、普通に暮らして行く中では委員会の役割を理解することができないということ。

現在は、ゼロリスクは無いことを前提として、委員会の評価結果等について消費者自らの判断が必要となってきた。長い目でみて判断できる消費者にならないといけない。出されているものをちゃんと受け止められる消費者になりたい。

○：委員会の役割が判りにくい。消費者庁ができたりますます判りにくくなるのではないかな。

事業者の申請書類を評価しており、委員会自らのデータに基づくものではなく、リスク評価の中身に説得力がない。

実質的に米国産牛肉の輸入再開につながり、政治的影響力があつたかのようにみえたことも問題である。

また、一昨日、米国産輸入牛肉で脊柱が出てきたが、その際に安全性の前提が崩れたということで、委員会の場で議論を行えば良かったと感じている。

食品安全委員会に対する信頼感がより高まるようにしてほしい、議論の中身が深まっていない。本日の委員会を傍聴したが、慎重論が出てあまり深く掘り下げられずそのまま流れてしまっていた。

審議の公開は一步も二歩も前進している。公開制をさらに広げ、国民に強烈にアピールすべき。今後の改善を期待したいし、応援したい。

- ：2003年の設立以前から食品安全委員会には大きく期待をしていた。リスクの未然防止を図り、科学者のネットワークを生かして様々な評価を行うものと期待していたが、結局お墨付きを与える機関が1つ増えただけでは、という消費者の声もある。

業者のデータをそのまま使うのではなく、遺伝毒性や慢性毒性について委員会が独自にデータを持ち判断してほしい。

また、農薬などは新たに認可するばかりではなく、より効果が期待できるものが認可されたら、古いものは使わないようにするなど、トータルで減らす方向で考えてほしい。

リスコミについても今ひとつ判りにくい。内容が専門的過ぎて暮らしの視点から乖離しているような気がする。非公開の会議も増えている。より親しみやすく、暮らしの視点をもったリスコミを行ってほしい。

- ：食品安全基本法の成立や委員会の設立に必死に取り組んできたが、設立後もその運動をつなげて行く消費者側の責任もある。また、委員会を消費者のために有効に機能させていくことも我々消費者の問題であるということを経験したことを地域の消費者へ伝えていく必要がある。

ジュニア食品安全委員会やサイエンスカフェ等は消団連もPRして来ており、参加者には好評であるし、ワークショップ方式の意見交換会も好評である。

委員会の至らない部分もあるが、私たち自身の問題もある。これからは消費者自身が参加し、見ていくことも必要。

- ：サイエンスカフェに参加して初めて食品安全委員会を知った。

世田谷で区民講師を行っているが、この間食に関する講演依頼が急増し、高齢者や子育てサロン等で話して来た。自分たちなりに色々情報を集めて勉強したつもりであったが、サイエンスカフェで聞いた内容とこれまでの講演で話してきたことを比べると全然違うことを話していたことが判ったので、反省している。

区民講師は食品企業のOBや食に関心のある主婦が中心で、僅かな時間で養成され、科学的に話すということがどういうことか判らない、中には「リスコミ」という言葉も知らない方もいる。食品安全委員会からきちんと情報をいただけるような仕組みがあるとありがたい。

また、我々のような区民講師に対して継続的に勉強させていただける場を提供してほしい。

- ：各月の定例会の折に各団体に対してHP等から収集した情報を伝えている。吉川氏の国会同意人事の件についても意見交換を行った。各団体へ戻って話していただけるようお願いしており、消費者団体同士の連絡の要の役割を果たそうと努力している。

また、東京都の食品安全推進計画にも関わっているが、都はリスコミを重要視して推

進計画の柱としている。また、マスコミの誤った情報への消費者の影響を考え、マスコミへの情報提供のありかた等やリスコミの人材育成を計画しているので参考とされれば良いと思う。

リスコミについて、壇上対会場での一方的議論では理解を得ることは難しい。最近の消費者の中には他の専門家の異なる意見を調べて発言するケースもある。評価として取り上げる意見・上げない意見の根拠を示して、同じ壇上で議論すれば対立点が明らかとなり、我々の判断材料となる。リスコミはこのような工夫が必要と思う。

厚労省などは意見交換会前のヒアリングを行う場合もある、この場合は小グループでの議論なので、意見を出しやすいし、これを受けて大きな意見交換の場での資料や進行上の工夫を行うことができる。

地方にも来て直接対話してもらいたい。サイエンスカフェ等委員会が地方で小規模に行う事業はあるが、その間で地方の消費者団体が仲立ちの役割を果たして、何を聞きたいのか何を疑問に持つかの理解を進めていくことができる。

やはり、国の機関は実体として消費者に役立つことが実感できることが必要なので、消費者団体を活用して取り組んでももらいたい。

○：リスコミでは難しい専門的な内容を理解するよりは、コミュニケーションを行うことが重要であり、1人1人の意見が言える機会が重要と思う。例えば体細胞クローン家畜についての意見交換では、何故その技術が必要か？といった、前提に関する説明がないと、信頼感を得ることが難しい。

併せて説明者のコミュニケーション能力が大きく問われると考える。委員はリスコミの専門家でなく科学的な専門家であり、消費者の様々な疑問に対して上手く答えられないことも一因かもしれない。地道な参加者の積み重ねで知ってもらうことしかないのではないか。

○：リスコミがこの6年間行われてきたが、評価の内容そのものについての説明に多くの時間が割かれると、何故という背景の説明が少なくなり、消費者の理解が進まなくなる。コミュニケーションの場をどのように作るかといったコーディネート力が必要である。

食品安全委員会もリスクコミュニケーション育成事業等、地域で様々な取り組みを行っているが、今日話があったような地域で困っている人を対象にするなど、もっとニーズに配慮して行えば、取組みはさらに広がっていくのではないか。

また、実験データは、誰のデータかでなく、科学的に信頼できる形でデータが作成されることが重要であることについて、消費者や事業者をはじめとした関係者の理解が深まることが必要である。そのため必要ならば、データ作成に関するリスコミ、サイエンスコミュニケーションを推進する必要がある。

○：リスク評価とか管理の説明から入って行くのではなく、もっと根本的なものから、例えば何故食安委ができたのかとか、もう少し広い視点で伝えることが良いのでは。

○：長い間食の安全について生協で関わってきた。かつては判らないことがあっても誰に聞けば良いか判らずに苦労してきたが、今は食安委に聞けば対応してもらえる。

食品安全委員会があるということが第一の安心につながる。しかし、最近の食の安心に関する出来事が多く出てきたものを何でも食安委に持ち込むべきではない。

安心は委員会が直接関わるものではないことを消費者側が理解しておかなければならない。消費者自体がコミュニケーション能力を高める必要がある。

○：委員会や意見交換会に足を運ぶことによってようやく判るようになって来たが、一般の人が理解するのは難しい。評価の内容をちゃんと知らせて理解してもらう機会を増やす必要がある。

カドミウムや農薬について消費者は関心が高いはずなのに実際にリスコミにはあまり出て来ないというお話があったが、サイエンスカフェのような少人数での取組は有効であり重要と思う。

このような工夫を行いながら、顔や取組みの内容が見える身近な取組みを進めてほしい。

○：委員の入れ替えがあったということは、新たな体制になるということか？体細胞クローン家畜に関して消費者の不安に対応しきれてないのは今の委員会の限界ではないか。

先ほど提案した、評価の過程で消費者や他の関係機関との議論を行いこれを最終評価に反映するような体制へ変えるべきではないか。

△：当初より委員は担当分野ごとに選ばれることになっているので、役割としての変化はない

△：リスコミを行うにあたり安全性の他に参加者は何を知りたいのか、参加者のニーズに沿って私たちはちゃんと話しているのかについて疑問に思っていた。

団体を通じて消費者のニーズも捉えるなど、様々な場面でコラボレートしていきたい。またサイエンスコミュニケーションも重視していきたい。

△：昔医薬品メーカーにもいたこともあるが、データについては、昔は国際的ルールが無かったと言える。現在は国際ルールによってデータを作成する際のレベル合わせがされている。きちんと作られた日本のデータは海外でも通用するしその逆もしかり。

また、事業者が国際的に評価された外部の機関に依頼してデータを出してくるケースも増えている。

評価する側もいろいろな情報を入手し日常的にすりあわせを行っている。

○：データについて公開性をしっかりして欲しい。クローンも実験頭数が少ない。みんなが議論できる場を設けていただきたい。

△：動物実験を行う際のデータの作成方法は国際的に統一されている。また社外の専門会社に委託してデータを出している場合も増えている。

(以 上)